

富山市埋蔵文化財調査報告73

とやまじょうかまち
富山城下町遺跡主要部発掘調査報告書

—レーベン富山総曲輪レジデンス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査—

2014

富山市教育委員会

富山市埋蔵文化財調査報告73

とやまじょうかまち
富山城下町遺跡主要部発掘調査報告書

—レーベン富山総曲輪レジデンス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査—

2014

富山市教育委員会

例　　言

- 1 本書は、マンション建築に先立つ富山城下町遺跡主要部の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、株式会社タカラーベンの発注を受け、富山市教育委員会埋蔵文化財センターの監理のもと、株式会社イビソク北陸支店が実施した。
- 3 本書で報告する調査の概要是次のとおりである。

遺跡所在地	富山市総曲輪4丁目地内
調査面積	96 m ²
発掘調査期間	平成26年5月7日～6月9日
整理調査期間	平成26年6月9日～12月26日
監理担当者	細辻嘉門（富山市教育委員会 埋蔵文化財センター 主査学芸員）
発掘調査担当者	日聖祐輔（株式会社イビソク 北陸支店）
整理調査担当者	日聖祐輔（株式会社イビソク 北陸支店）
- 4 発掘調査及び整理調査に際し、下記の諸氏・諸機関のご指導・ご協力をいただいた。記して謝意を表します。（五十音順、敬称略）

河村健史（福井県立歴史博物館）
- 5 自然科学分析は株式会社パレオ・ラボに依頼し、その報文を第4章に記載した。
- 6 本書の執筆は、第1・2章を細辻、第3章第1・2・3節、第5章を日聖、第3章第4節を名久井伸哉（（株）イビソク）が行い、各々の責は文末に記した。全体の編集は、細辻と日聖が行った。
- 7 第5章に掲載した近世絵図5葉（部分）の使用について、富山県立図書館の配慮を受けた。
- 8 出土遺物・原図・写真類は富山市教育委員会が保管している。

凡　　例

- 1 本書で用いた座標は世界測地系第VII系である。挿図の方位は真北、水平基準は海拔高である。
- 2 層序および遺物觀察表で記載した色調は、農林水産省農林水産技術會議事務局監修、財團法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖 1996年版』に拠る。
- 3 遺構記号は、構：SD、井戸：SE、土坑：SK、ピット：SP、その他の遺構：SXを用いた。
- 4 挿図中の網掛けは、次のとおりである

地山  油煙  石断面

目　　次

第1章 調査の経過	
第1節 調査にいたる経緯	1
第2節 発掘作業及び整理作業の経過	1
第2章 遺跡の位置と環境	
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査の方法と成果	
第1節 調査の方法	6
第2節 層序	6
第3節 遺構	6
第4節 遺物	11

第4章 自然科学分析	
第1節 富山城下町遺跡主要部の花粉分析	15
第2節 富山城下町遺跡主要部 地山堆積物中の珪藻化石群集	16
第5章 総括	20
参考・引用文献	
写真図版	
報告書抄録	29

挿図目次

図 1 調査区位置図 (1/2,500).....	2
図 2 調査区周辺の地形 (1/25,000)	2
図 3 周辺の遺跡分布図 (1/50,000)	5
図 4 基本土層図 (調査区北壁断面、1/80).....	6
図 5 グリッド配置図 (1/200).....	7
図 6 調査区全体図 (1/80)	7
図 7 遺構平面図・断面図 1 (1/40)	9
図 8 遺構平面図・断面図 2 (1/40・1/60)	10
図 9 出土遺物 1 (1/4).....	12
図 10 出土遺物 2 (1/4)	13
図 11 富山城下町遺跡（地山1層）から産出した 花粉化石およびプレパラート検査状況.....	15
図 12 堆積物中の珪藻化石分布図	19
図 13 堆積物中の珪藻化石の顕微鏡写真	19
図 14 万治年間旧富山市街図	20
図 15 御調理富山絵図	20
図 16 御城内外御模矢御船図	20
図 17 越中富山御城下絵図	20
図 18 焼難印	21

表目次

表 1 出土遺物観察表.....	14
表 2 分析試料一覧表.....	15
表 3 産出花粉粒子一覧表.....	15
表 4 珪藻分析試料一覧.....	16
表 5 堆積物中の珪藻化石産出表.....	17

写真図版目次

写真図版 1

1. 調査前状況（東から）

2. 調査区光面状況（東から）

写真図版 2

1. SX001 断面・完掘状況（南西から）

2. SX002 断面・完掘状況（南から）

3. SK012 所面・完掘状況（北東から）

4. SK013 断面・完掘状況（北東から）

5. SK014 断面（南から）

6. SK014 完掘状況（南から）

7. SK015 断面（南から）

8. SK015 完掘状況（南から）

写真図版 3

1. SK022 断面・完掘状況（北西から）

2. SE039 検出状況（南西から）

3. SE039 断面・完掘状況（西から）

4. SK047・052・053 完掘状況（南東から）

5. SD028 断面・完掘状況（南東から）

6. SD028 断面・完掘状況（南から）

写真図版 4 出土遺物 1

写真図版 5 出土遺物 2

写真図版 6 出土遺物 3

第1章 調査の経過

第1節 調査にいたる経緯

富山城下町遺跡主要部(遺跡番号2011048)は、平成25年度に富山市教委(以下市教委)の試掘調査により確認し、『富山市遺跡地図』に登載され、周知の埋蔵文化財包蔵地となった。

遺跡内ではこれまで各種開発に先立つ試掘調査及び発掘調査が数回行われており、それに伴い遺跡範囲の見直しが行われ、現在の埋蔵文化財包蔵地面積は144,000m²である。

平成26年1月6日、富山市総曲輪4丁目地内において、株式会社タカラレーベン（以下タカラレーベン）より、マンション建設について埋蔵文化財包蔵地の所在確認依頼があった。建設予定地全域1068.57m²が富山城跡に含まれていたため、平成26年2月24日～2月25日に市教委で試掘調査を実施したところ、調査対象地西側408m²で、江戸時代の遺物包含層と土坑・溝・ピットを検出し、近世陶磁器などが出土した。埋蔵文化財の所在を確認したため、試掘調査の結果に基づき、タカラレーベンと建設に係る埋蔵文化財の取扱いについて協議を行った。協議の結果、建設予定地西側のタワーパーキング工事の計画が遺構検出面よりも深く、埋蔵文化財を現地で保存できないため、工事部分96m²について発掘調査を行い記録保存することとなった。

文化財保護法93条第1項に基づく埋蔵文化財発掘の届出は、工事主体者から平成26年1月30日付けで市教委へ提出され、市教委の副申を付けて平成26年1月31日付け埋文第387号で富山県教育委員会へ提出した。

文化財保護法99条第1項に基づく埋蔵文化財発掘調査の報告は、市教委から平成26年5月23日付け埋文第52号により富山県教育委員会へ提出した。

第2節 発掘作業及び整理等作業の経過

発掘調査業務は工事主体者である株式会社タカラレーベンから株式会社イビソクに委託し、市教委職員が発掘調査の監理にあたることとした。平成26年5月2日付で三者協定を締結し、発掘調査に着手した。発掘調査業務は整理調査期間も含め、平成26年5月2日から12月26までの期間とした。

発掘調査は平成26年5月7日から同年6月9日まで行った。表土掘削はバックホウを用いて平成26年5月7日から平成26年5月9日まで行った。堆土は調査区外の敷地内に横置きした。引き続き表土除去完了後の5月12日から人力による包含層掘削・遺構検出作業を開始した。

試掘調査結果では、江戸時代の遺物包含層と遺構面が堆積することが想定されており、掘削を開始すると、調査区全体で江戸時代後期の遺構が確認され、遺物が出土した。遺物包含層の遺物は、任意にグリッドを設定してグリッド毎に取り上げた。包含層掘削が完了したところから遺構検出作業を行い、その後遺構掘削作業を行った。掘削作業と並行して随時写真撮影・測量・図面作成作業を行った。5月30日には遺構掘削を終え、高所作業車を使用して全景写真を撮影した。6月3日には現地作業終了確認と土壤試料採取を行った。

当初、現地埋め戻しは行わない予定であったが、工事主体者から依頼があり、6月4日から現地埋め戻しを開始した。6月9日に埋め戻し作業完了と撤収を確認し、発掘調査を完了した。

整理調査は、発掘調査終了後、株式会社イビソクで実施した。遺物接合作業は、遺構毎やグリッド内の他、グリッドと対応する遺構と包含層でも行った。遺構出土遺物でも特徴的なもの、全体のプロポーションがわかるものを優先して図化した。遺物写真是デジタルカメラを使用し、図化したものと優先して撮影した。これらの作業と並行して原稿作成を行い、平成26年12月26日に本書を刊行し、発掘調査業務を完了した。

(續述)



図1 調査区位置図 (S=1/2,500)



図2 調査区周辺の地形 (S=1/25,000 2007年国土地理院に加筆)

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

富山市は富山県のほぼ中央部に位置する。富山市の地勢は大まかに山間部と平野部に大別され、南が高く、北が低くなるという地勢を示しており、海岸から標高3,000m級の高山地帯まで変化に富む。

富山平野は富山県中央部の大部分を占めており、北は富山湾と面し、東端は早月川扇状地、西端は県のほぼ中央を二分する呉羽丘陵に、南は飛騨山地から続く丘陵に接する。神通川・常願寺川とその支流が形成した扇状地や低位面・氾濫平野の発達が顕著である。

富山城下町遺跡主要部(図3・斜線部)は、富市中心部の旧北陸街道とされる平和通りを挟んだ東西700m、南北140mに広がる、近世の集落遺跡である。

今回調査区の所在する富山市総曲輪4丁目地区は、富山湾から7.5km内陸に入った神通川右岸の富市中心部に位置する。神通川の堆積によって形成された緩扇状地、氾濫平野上に立地する(図2)。現在の地形は、中心市街地という性格上開発が繰り返されほぼ平坦であるが、過去には神通川とその支流が幾度となく流れを変え、旧河道がいくつか確認される。

神通川は、岐阜県の川上岳に源を発した渓谷が断崖絶壁を開析し、富山、岐阜県境で高原川と合流して、富山市猿津付近で富山平野に出る。山麓山腹に段丘平野や扇状地を形成しながら北流し、富山市鶴島付近で井田川と合流して富山湾に注ぐ。富山市中心部の神通川は、現在はほぼ真っ直ぐに北流して富山湾に注いでいるが、かつては現在の富山中部高校の辺りで東に曲がり、富山城の北を東に流れ、現在の赤江町の辺りで大きく西に曲がって蛇行していたことが、土地条件図や旧地図などによつて確認できる。このため、蛇行部分でしばしば水害がおこり、水害対策として明治時代に蛇行部分を短絡する分水路を開削し(馳越線)、一定量を超える洪水は分水路に流れるようにした。やがて元の本流には水が流れなくなったため、馳越線が本流となり、かつての本流は川幅を狭め松川となった。廃川地は富岩運河開削の排土により埋め立てられ、県庁や市役所が建設された。

調査区の東200mを国道41号が南北に貫いている。調査区の南30mには旧北陸街道にあたる平和通りが東西に通っている。地区の東には総曲輪通り商店街や中央通り商店街が広がり、富山市の中心市街地を形成している。調査区の周辺一帯の宅地は建物が立ち並んでいる。土地利用は、富山城下町の形成された頃は、大手門の近くであり、城下町の中枢であったと推定される。今回の調査地は総曲輪4丁目地区の東端、遺跡の南中部に位置する。調査前の現況は宅地である。調査区付近の標高は約8mで、ほぼ平坦である。

第2節 歴史的環境

富山城跡と富山城下町遺跡主要部について主に発掘調査について概観する。

本遺跡では、富山城築城以前の遺構・遺物も検出している。平成22年度の城址公園西部(旧西ノ丸)内の工事立会調査では、「宅持」と墨書きされた奈良時代後期の須恵器が出土した。官衙関連施設の存在する可能性がある。平成19年度の本丸東部の発掘調査では、土里下部から笄や漆椀、陶磁器が出土し、室町期の武家居館の存在が推測された。また、その下層から平安時代の湿地の存在を確認し、築城以前の地形が明らかとなった。平成16年度の総曲輪地区の発掘調査では奈良・平安時代の遺構を検出した。この他、散発的であるが、古い時代では縄文時代や弥生時代の遺物も出土しており、室町時代以前から、遺跡周辺一帯は開発が進んでいたと考えられる〔富山市教委2014b〕。

なお、富山城築城以前の時代の遺跡は、「総曲輪遺跡」として、「富山城跡」や「富山城下町遺跡主要部」と区別して、埋蔵文化財包蔵地としている。

戦国時代に、この地では神保氏により城が築かれた(戦国期富山城)。戦国期富山城は、従来は現在の城址公園の約1km南の星井町周辺にあったとする説が有力であったが、城址公園の整備に伴う一連の発掘調査によって、現城址公園内に戦国期富山城の遺構が良好に残っていることが明らかとなった。

戦国時代の発掘調査成果としては、城址公園中央部では、城を東西に分けると考えられる堀を確認し、標高差から東側の郭が本丸、西側が二ノ丸と推定されている〔市教委2004〕。この堀は戦国末に完全に埋没し、水平に整地されたことが判明した。城址公園の北部ではこれに直交する東西方向の築堀を検出した。本丸東部では土取り跡とみられる歴先による凹凸面を検出した〔市教委2006a・2008〕。整地土を採取した可能性が考えられる。本丸北東部では井戸を検出した。二ノ丸では鍛冶遺構とみられる焼土が見つかり、周辺から羽口、鍛造剥片、鉄滓、土壁片が出土した。砥石や刃物の表面仕上げに使用するとみられる雲母も見つかり、研磨までの工程を行っていたと推定される〔市教委2004〕。城下町では、平成20年度に総曲輪4丁目・旅籠町地区で再開発ビルに先立つ発掘調査で、15世紀後葉から16世紀後葉の溝・土坑を検出した〔市教委2010〕。溝は直交しており、断面観察で箱型から築堀に作り替えられていることがわかった。戦国期富山城との関連は不明であるが、城下町の区画溝の可能性がある。現在のところ、戦国期富山城および城下町の遺構・遺物は点的にしか把握されておらず、全体構造を解明するには至っていない。

近世に入ると、慶長10(1605)年、加賀二代藩主前田利長が、隠居により富山城に入った。その際、富山城の大規模な改修が行われ、近世城郭として整備された(慶長期富山城)。ところが慶長14(1609)年、大火により富山城は焼失しその後再建されないまま、元和元(1615)年、一国一城令によりいったん廃城となった。寛永16(1639)年、加賀藩から10万石を分与され富山藩が成立し、それに伴って寛文元(1661)年から幕府の許可を得て本格的な整備が行われた(寛文期富山城)。なお、慶長期富山城と寛文期富山城の繩張りが異なることから、大幅に変更が加えられたとする説がある〔古川2006〕。

近世富山城については、城址公園整備や路面電車敷設、民間開発に伴って発掘調査が行われている。平成14年度から継続している城址公園整備に伴う発掘調査では、本丸・西ノ丸を対象とし、井戸・石組溝・廃棄土坑などの遺構を検出した。平成21年度調査では、本丸御殿に伴う沓脱石や飛び石とみられる石材を確認した。石垣解体に伴う発掘調査では、石垣の構造や積み替えの過程が判明した。平成19年度・22年度には、本丸東南部にある土壘の調査を行い、40度の勾配を持つこと、盛土の造成方法が明らかとなった。西ノ丸北西部の内堀跡地では、現地表面下5.8mで堀底を確認した。平成20年度には主に路面電車敷設に伴う発掘調査・工事立会調査で二の丸の二階櫓門や三の丸の大手門の石垣基底部を確認し、位置や規模が判明した。また、三の丸南部では寛文期以降の絵図に表れない堀を検出し、慶長期の外堀とみられている〔市教委2009b、2014b〕。

城下町では、平成6年に外堀の南東角沿いの調査で、井戸・溝・廃棄土坑を確認した〔市教委2005〕。平成17年度の調査では武家地と町人地を分ける背割下水を初めて検出した。背割下水は素掘りから石組みへ作り替えられたこと、背割下水北側の武家地は「戸田式部」と書かれた木札が出土し戸田式部邸であること、背割下水南側の町屋では小鍛冶が行われていたことが判明した〔市教委2006b〕。平成20年度の調査でも背割下水を検出し、背割下水は2時期であること、背割下水北側武家地では井戸や土坑が密集し裏庭と考えられることが明らかとなった。背割下水南側の町人地は遺構密度が高く、土坑内に礎石を置いた建物基礎を検出した〔市教委2010〕。平成25年度には北陸街道南側の町屋の調査では井戸・トイレ等を検出した。木製品の素材や端材が大量に出土し、木材加工場の存在が推測される〔市教委2014a〕。今回調査区の東150mにある一番町の調査では、背割下水を検出し、構造と変遷過程が3時期あることが明らかとなった〔市教委2014b〕。

(細辻)

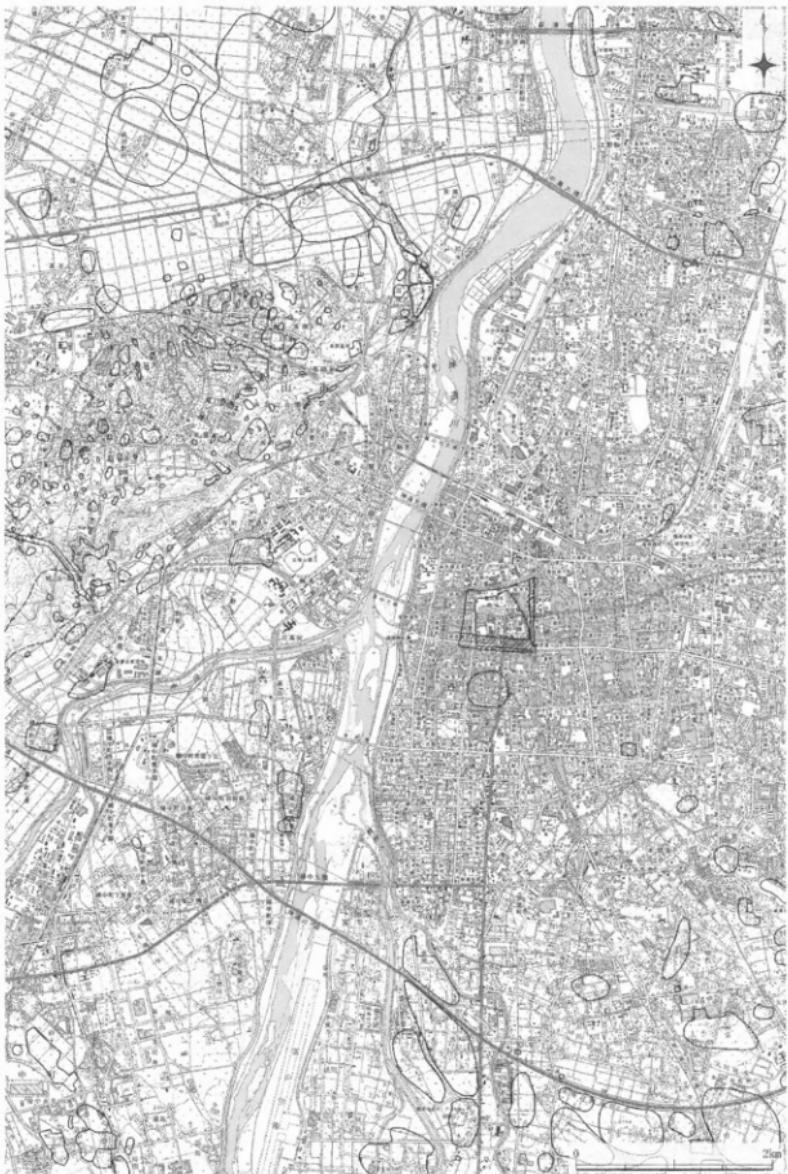


図3 周辺の遺跡分布図 (S=1/50,000)

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

調査区は工事設計により、A・B区の2区に分かれる。総面積は96m²である。当該地は富山城下町の武家屋敷地にあたることから、屋敷を構成する建物跡などの存在が想定された。

表土掘削には重機を使用し、試掘調査結果を参考に遺構検出面である地山面まで掘り下げた。表土掘削後、A区のみグリッドを設定した。グリッドは調査区中央部に任意で打設し、四分割とした（図5参照）。

グリッド設置後、人力で遺構検出を行った。検出した遺構の掘削は、ピット・土坑等は半裁、溝は畔を設定して行った。遺構測量には光波測距儀を使用し、部分的に写真測量を併用した。また、写真撮影には一眼レフデジタルカメラと35mmモノクロフィルムを用い、主要遺構等には中判カメラ（カラーリバーサル・モノクロ）を使用した。全ての遺構を完掘後、高所作業車にて全景写真撮影を行った。撮影終了後には珪藻分析、花粉分析を行うための土壤サンプル採取を調査員が行った。すべての作業終了後、調査区を埋め戻して調査終了とした。

第2節 層序

本調査区での基本層序は下記の通り大きく4層にわかれる。このうちII層の上端部には部分的に洪水堆積と考えられる灰白色砂層の堆積が確認できた。またIV層より下層には河川堆積による細粒砂～粗粒砂が互層堆積している状況を確認した。なお、IV層以下の堆積土層は花粉分析、珪藻分析を行った（第4章参照）。

I層 現代の造成土（コンクリート・巨石を含む）

II層 明治時代以降の造成土（焼土を多く含む）

III層 近世の造成土（近世遺物を多く含む。III層上面が遺構掘り込み面）

IV層 地山（遺構検出面）

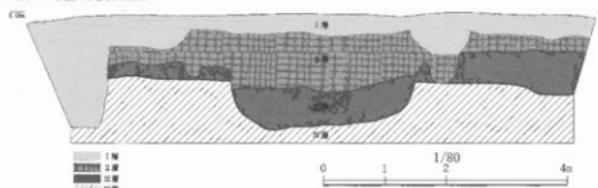


図4 基本土層図（調査区北壁断面）

第3節 遺構

SX001（写真図版2）

B区西端部で検出した溝状遺構である。幅1.50m以上、長さ1.89m以上、深さ1mを測る。遺構東端部以外の三方は調査区外へ延びる。壁面はほぼ垂直に、階段状に立ちあがる。SK022と重複関係を持ち、それよりも古い遺構である。遺物は出土せず、全体像や性格は不明である。

SX002（写真図版2）

B区東端部で検出した溝状遺構である。幅1.45m以上、長さ2.16m以上、深さ1.25mを測る。壁面はほぼ垂直に立ちあがり、底面は平坦である。遺構西端部以外の三方は調査区外へ延びる。このうち北の延長にあたるA区では、本遺構と同一とみられる遺構は確認できなかったため、A区とB区の間で終息するか、SK003によって消滅している可能性がある。遺物は出土せず、全体像、性格は不明である。

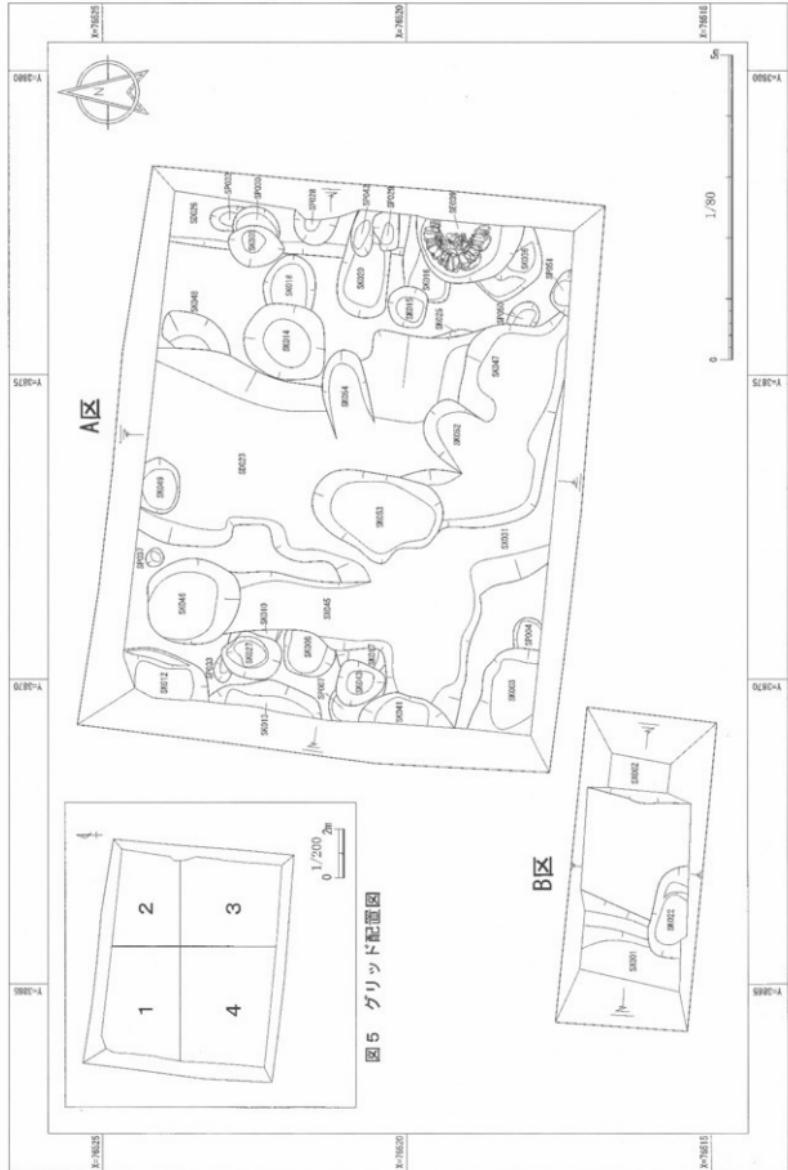


図5 グリッド配置図

図6 調査区全体図

SK012（図7、写真図版2）

A区1グリッドで検出した土坑である。長軸長1.77m、短軸長0.48m、深さ0.73mを測る。遺構の西端、北端は調査区外へ延びる。壁面は直立気味で階段状に立ち上がり、底面は平坦である。また、南接するSK013と重複関係を持ち、それよりも新しい遺構である。埋土からは16世紀代の土師皿が出土した。混入遺物であろう。

SK013（図7、写真図版2）

A区1グリッドで検出した土坑である。長軸長1.60m以上、短軸長0.79m以上、深さ0.90mを測る。遺構の西端、北端は調査区外へ延びる。壁面は直立気味に立ち上がり、底面は平坦である。埋土からは近世陶器・越中瀬戸焼が出土した。また、北接するSK012と重複関係を持ち、それよりも古い遺構である。

SK014（図7、写真図版2）

A区2グリッドで検出した土坑である。長軸長1.41m、短軸長1.32m、深さ0.32mを測る。壁面は外方へ緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。埋土は黄灰色砂質土の単層に、多量の礫・近世陶磁器を含む。遺物の出土状況からみて廃棄土坑と考える。遺物はほぼ肥前系陶磁器で、時期は19世紀代である。

SK015（図7、写真図版2）

A区3グリッドで検出した土坑である。直径0.64m、深さ0.12mを測る。壁面は外方へ緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。埋土は黒色シルトの単層で、砂礫・近世遺物を多く含む。遺物は肥前系陶磁器・越中瀬戸焼が出土し、廃棄土坑とみられる。時期は19世紀代である。また、東接するSK016と重複関係を持ち、それよりも古い遺構である。

SK022（図7、写真図版3）

B区中央部・南壁際で検出した土坑である。長軸長1.54m、短軸長0.57m以上、深さ1.33mを測り、遺構の南北部は調査区外へ延びる。壁面は外方へ開きながら階段状に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。遺物の出土はない。

SD023（図8、写真図版3）

A区中央部を南北方向に走る溝である。遺構の北端は調査区外へ延び、南端は他遺構と重複するため不明である。検出長3.83m、幅2.44～3.22m、深さ0.46～0.63mを測る。壁面は外方へ緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。埋土は褐灰色シルトを基本に3層にわかれ、いずれの層も近世遺物を多く含む。遺物には肥前系陶磁器・越中瀬戸焼・土師皿・瓦器など16～19世紀の遺物がみられ、主体は19世紀代である。区画溝の可能性がある。

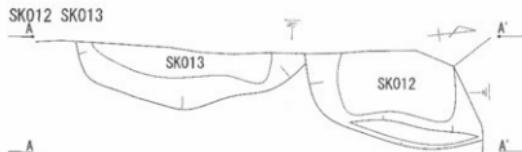
SD026（図8、写真図版3）

A区2・3グリッドで検出した南北方向の溝である。検出長3.61m、検出幅0.75m、深さ0.20～0.30mを測り、遺構西端以外の三方は調査区外へ延びる。壁面は外方へ緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。埋土は灰黄色シルトの単層で、近世遺物を含む。断面観察では、標高8.3m前後からの掘り込みを確認できることから遺構深度は0.7m前後に復元できる。遺物は近世陶器片・土師器片が出土しているが、詳細な年代は不明である。区画溝の可能性がある。

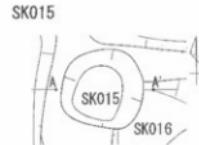
SE039（図7、写真図版3）

A区3グリッドで検出した井戸である。長軸長1.09m、短軸長1.03m、深さ1.59mを測り、遺構東半部は調査区外へ延びる。また、遺構上部はSK036によって削平を受ける。

遺構中央部には直径1m前後の石組井筒を設け、灰黄色シルトで埋まる。井筒は下半層に30cm前後、上半層に10～20cm前後の川原石を積み上げている。井筒内埋土からは近世陶磁器片、掘方埋土からは中世土師皿片が出土した。



- 1 10YR6/2 黄黄褐色シルト 粘性あり しまりあり 繊・炭化物1%
- 2 10YR5/2 黄黄褐色シルト 粘性あり しまりあり 繊・炭化物1%
- 3 2.5Y6/2 黄褐色シルト 粘性あり しまりあり 近世遺物含む。3~5cm大の礫5%
- 4 10YR4/2 黄黄褐色シルト 粘性あり しまりあり 10cm未満の礫10%、炭化物1%
- 5 10YR4/2 黄黄褐色シルト 粘性あり しまりあり 5cm未満の礫5%、炭化物1%、地山ブロック含む
- 6 7.5Y7/1 白灰色シルト 粘性あり しまりやや弱 繊・炭化物1%、近世遺物・地山ブロック含む

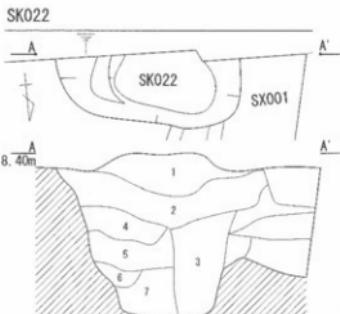
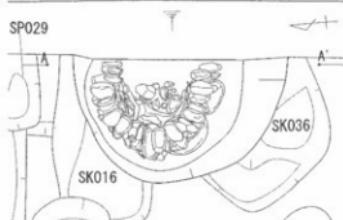


2



- 1 2.5Y4/1 黄灰色砂質土
粘性やや強 しまりやや弱 3~5cmのレキ・遺物多量

SE039



- 1 10YR6/1 褐灰色シルト 粘性あり 繊まりやや強 繊1%、炭化物5%
- 2 10YR6/1 褐灰色シルト 粘性あり 繊まりやや強 繊3%、炭化物5%
- 3 10B6/1 青灰色シルト 粘性あり 繊まりやや弱 繊・炭化物5%
- 4 5Y7/1 褐灰色シルト 粘性あり 繊まりやや弱 繊・炭化物1%
- 5 N6/1 灰色シルト 粘性あり 繊まりやや弱 繊・炭化物1%
- 6 5B7/1 青灰色シルト 粘性あり 繊まり弱 5mm土、少量混入
- 7 10B6/1 青灰色シルト 粘性あり 繊まり弱 炭化物5%

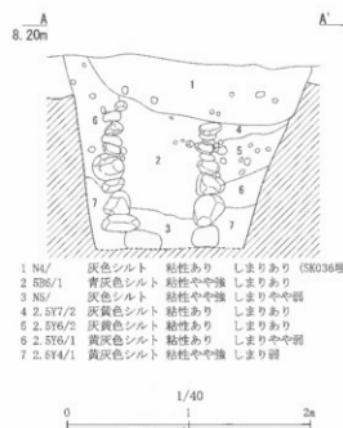
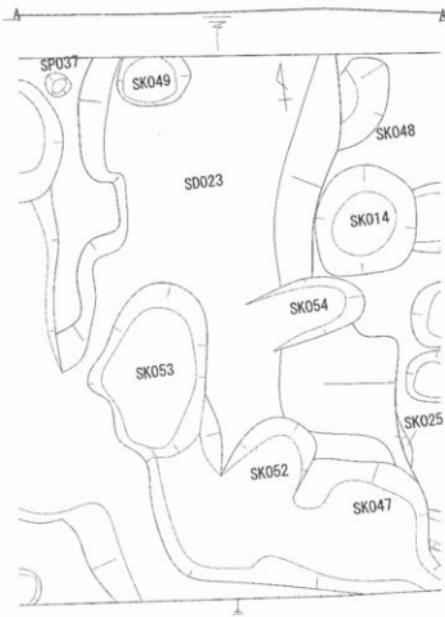


図7 遺構平面図・断面図 1

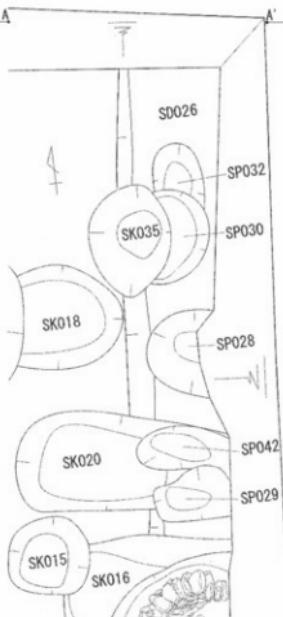
SD023



A-A'

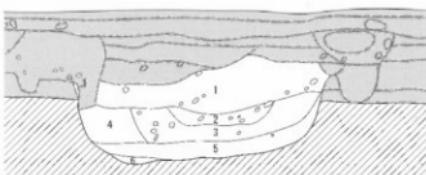
0.20m

SD026



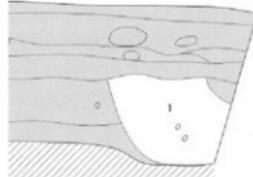
A'-A

0.20m



- 1 10YR5/1 黄灰色シルト 粘性あり しまりやや弱 近世遺物多量、炭化物・砂粒多く含む
- 2 10YR6/1 黄灰色シルト 粘性あり しまりやや弱 近世遺物含む
- 3 10YR4/1 黄灰色シルト 粘性あり しまりやや弱 近世遺物含む、炭化物・穢1%
- 4 10YR4/1 黄灰色シルト 粘性あり しまりやや弱 近世遺物・地山ブロック含む、炭化物・穢5%
- 5 SY4/1 灰色シルト 粘性あり しまり弱 近世遺物・地山ブロック含む、穢・砂粒1%
- 6 2.5Y6/2 灰黄色シルト 粘性あり しまりあり (SK049埋土)

1/60
0 1 2m



- 1 2.5Y6/2 灰黄色シルト 粘性あり しまりあり 近世遺物・地山ブロック含む

1/40
0 1 2m

図8 遺構平面図・断面図 2

SK047（写真図版3）

A区3グリッドに位置し、SD023掘削後に確認した。長軸長3.94m以上、短軸長1.64m、深さ0.93mを測る。壁面はほぼ直立するが、凹凸が激しく、埋土が壁面の深くまで混じることから、複数回の崩落があったものと考える。また、底面は平坦で地山である礫層が確認できる。埋土は砂粒を含む青灰色シルトで埋まる。底部が湧水層まで達しているため、井戸の可能性がある。

SD023・SK052と重複するが、新旧関係は確認できなかった。出土遺物は少ないが、17世紀代の染付筒碗（図9-6）が出土した。

SK052（写真図版3）

A区3グリッドで検出した土坑である。SK047同様、SD023掘削後に確認した。長軸長1.00m以上、短軸長0.89m、深さ0.68mを測る。壁面はほぼ直立し、底面は平坦で、地山である礫層を確認した。埋土は砂礫を含む青灰色シルトで埋まる。底部が湧水層まで達しているため、井戸の可能性がある。

SD023・SK047と重複するが、新旧関係は確認できなかった。埋土中からは越中瀬戸焼のほか、産地不明陶器が出土しており、17世紀代を主体とする。SD023より古い遺構とみられる。

SK053（写真図版3）

A区3グリッドで検出した土坑である。SK047同様、SD023掘削後に確認した。長軸長2.16m以上、短軸長1.45m、深さ0.65mを測る。壁面はほぼ直立する。底面は平坦で、地山である礫層が確認できる。埋土は砂粒を含む青灰色シルトで埋まる。底部が湧水層まで達しているため、井戸の可能性がある。

SD023・SK052と重複するが、新旧関係は確認できなかった。埋土中からは白磁小杯（図9-14）、越中瀬戸焼、土師器皿など17世紀代の陶磁器を主体に出土した。SD023より古い遺構とみられる。（日型）

第4節 遺物

今回の調査で出土した遺物はコンテナ8箱分である。出土遺物には肥前系陶磁器、越中瀬戸焼、瀬戸美濃焼、土師皿、産地不明陶器、瓦器、珠洲焼、須恵器、土製品、銅製品、石製品などがある。この中で主体となるのは肥前系陶磁器で、18世紀後半～19世紀代である。また、近世前期のものも一定量ある。古代・中世の遺物は極少量出土した。

A. 磁器（図9、写真図版4・5）

1、2、4～15は肥前系、3は瀬戸焼である。1、2は碗蓋である。1は口縁部内面に連弧紋を施し、見込に「壽」の文字を記す。2は見込に宝紋、外面には四方棒紋が描かれる。3、5は端反碗である。3は底部から緩やかに開きながら立ち上がり、口縁端部を丸く収める。見込と外面に草花紋がある。5は内面に格子紋が施され、高台は蛇の目高台である。4は丸碗である。底部から緩やかに開きながら立ち上がり、口縁端部を丸く収める。見込に鳥紋、外面には草花紋が描かれる。6は筒碗である。高台の疊付は露胎である。体部は直立し、外面には山水紋が描かれる。7～9は丸皿である。共通して底部から緩やかに立ち上がり、口縁端部を丸く収める。7は見込に草花紋が描かれる。8は蛇の目釉剥ぎ高台で、底部外面には朱文字の痕跡がある。見込に三方割銀杏紋が描かれる。9は蛇の目高台である。内面に草花紋、外面には唐草紋が描かれる。10～13は輪花皿である。10は見込に山水紋、11は梅ちらし紋が描かれる。12は蛇の目高台で見込に柘榴、外面には草花紋が描かれる。13は蛇の目高台で、底部外面に朱文字の痕跡がある。口縁端部には鉄釉が施される。14は白磁の端反小杯である。蛇の目高台で、疊付のみ露胎している。15は青磁の丸碗である。底部から緩やかに立ち上がり、口縁端部は尖り気味である。

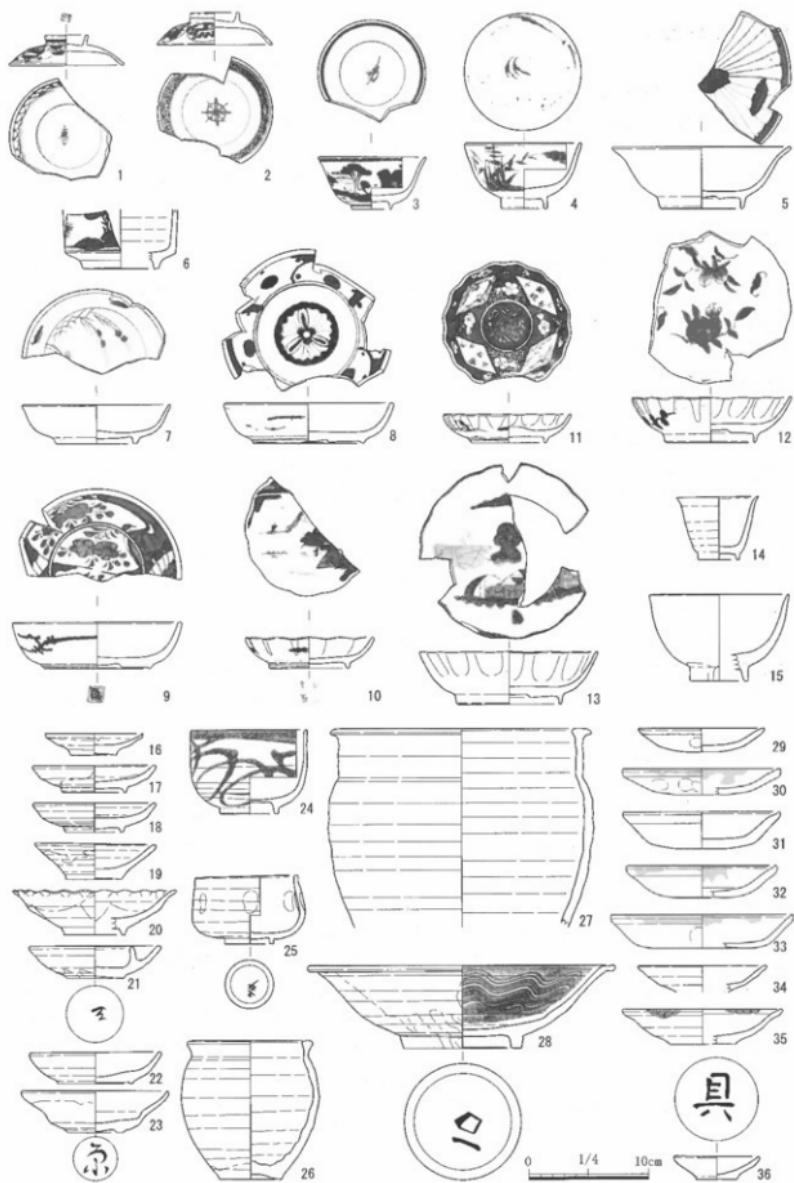


図9 出土遺物 1

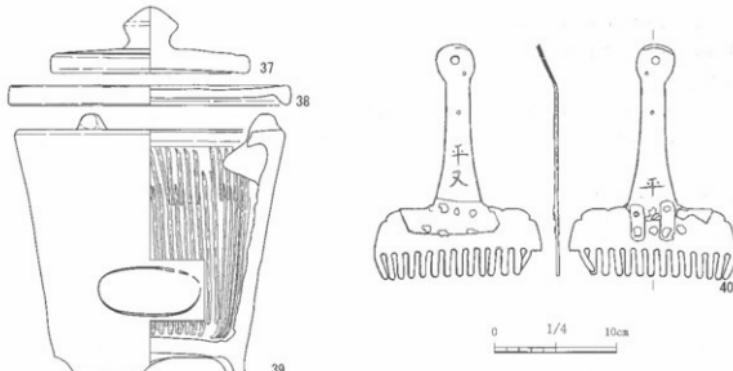


図10 出土遺物2

B. 陶器（図9、写真図版5・6）

16～21は越中瀬戸焼である。16～19は鉄釉小皿である。16は口縁部周辺のみ施釉する。17、18は削り出し高台で、見込に印花紋を施す。体部外面下部に稜を持つ。19は外面の口縁部以下が露胎である。底部外面は回転糸切りである。20はひだ皿で、削り出し高台である。21は灯明受皿である。底部外面は回転糸切りで、墨書記号を記す。

22は瀬戸焼の灰釉小皿である。底部から緩やかに立ち上がり、口縁端部を丸く收める。底部外面に輪トチ痕が残る。

23、28は唐津焼である。23は腰折皿である。体部外面から高台にかけて露胎である。底部外面に墨書がある。28は大鉢である。底部から緩やかに立ち上がり、口縁端部は外反しながら丸く收める。底部外面に墨書記号を記し、内面は釉薬による波状紋を施す。

24、25は产地不明の碗である。24はビラ掛碗である。底部外面はヘラ切りされ、墨書記号を記す。体部はほぼ直立し、口縁端部を丸く收める。25は拳骨碗である。底部から緩やかに内傾しながら立ち上がり、口縁端部を丸く收める。底部外面には記号とみられる墨書を記す。

26、27は上野・高取系甕である。26は小甕である。頭部は短頸でくの字状を呈する。口縁部は方頭形で、底部外面は露胎である。27は中甕である。口縁部は方頭形で、体部内面、底部外面は露胎である。

C. 土師皿（図9、写真図版6）

いずれもロクロ成形で、29・34以外は口縁部に煤が付着する。

29～33は中世土師皿である。体部の立ち上がりが低いもの（29・30）と高いもの（31～33）がある。口径は13cm前後が多く、15cm前後のもの（33）もある。

34～36は近世土師皿である。34・35は器壁が薄く、35は底部に糸切り痕が残る。36は見込に墨書で「具」の文字を記す。低い柱状高台を持ち、外面に回転糸切り痕が残る。

D. 瓦器（図10、写真図版6）

37、38は火消壺の蓋である。37は宝珠形のつまみを持ち、口縁部には浅い沈線を施す。38は口縁部が下方へ突出し、端部を丸く收める。39は焜炉である。底部外面には三足を設ける。体部下半には楕円形の空気口があり、底部内面には目皿の痕跡を確認した。また、体部内面には縦位に強い櫛目を施

し、口縁上端部には五徳とみられる突起を持つ。

E. 銅製品（図10、写真図版6）

40は火鉢道具で、灰搔である。柄の端部は円形でやや湾曲し、中央部に円形孔を持つ。齒は1本欠損するが、全部で15本である。柄と齒は2か所、鉛留めで固定する。また、柄の中央部には表面に「平又」、裏面に「平」の字を刻書する。この文字は出土した染付碗の焼継印にも見受けられる。（名久井）

表1 出土遺物観察表

保管番号	種類	習慣	產地	口径	器高	底径	素地色調	年代	調整	備考
1 SD023	磁器	瓶蓋	肥前系	9.3cm	2.5cm	3.5cm	-	19c	内面：草花紋、團扇 外面：草花紋、團扇	「團扇」
2 SD023	磁器	瓶蓋	肥前系	9.3cm	2.7cm	3.9cm	-	19c	内面：安紋、團扇 外面：方角輪紋	
3 SD023	磁器	瓶蓋	端反模	8.6cm	4.3cm	3.1cm	-	19c	内面：團扇 外面：草花紋、團扇	
4 SD023	磁器	丸皿	肥前系	9.4cm	5.4cm	3.8cm	-	19c	内面：鳥紋 外面：草花紋（蘿蔓？）	
5 SD023	磁器	端反模	肥前系	14.3cm	5.1cm	6.6cm	-	19c	内面：格子紋、團扇	蛇の目高台
6 SK047	磁器	瓶蓋	肥前系	-	(4.8cm)	(4.3cm)	-	17c後半	外面：山水紋	曼村のみ露胎
7 SD023	磁器	丸皿	伊万里	12.1cm	3.2cm	6.6cm	-	17c後半	内面：草花紋、團扇	
8 SK015	磁器	丸皿	肥前系	13.5cm	3.3cm	9.0cm	-	19c	内面：二方斜切合口紋 外面：團扇	蛇の目割引が施す 追跡剖面に朱文字（文字不明）
9 残存器	磁器	丸皿	肥前系	13.6cm	3.8cm	8.6cm	-	19c	内面：草花紋、團扇 外面：團扇	蛇の目高台
10 SD023	磁器	輪花皿	肥前系	10.4cm	2.6cm	6.6cm	-	19c	内面：山水紋 外面：團扇	
11 SD023	磁器	輪花皿	肥前系	10.4cm	2.4cm	6.0cm	-	19c	内面：輪ちらし紋 外面：團扇	
12 SK014	磁器	輪花皿	肥前系	12.8cm	3.8cm	7.2cm	-	19c	内面：草花紋、團扇 外面：草花紋	蛇の目高台
13 SK015	磁器	輪花皿	肥前系	14.6cm	4.3cm	8.6cm	-	19c	内面：葛井紋 外面：文様移し	蛇の目高台、全体に貫入 追跡剖面に朱文字（文字不明） 日本製と推定される樹からい
14 SK053	白磁	端反小杯	肥前系	5.7cm	5.2cm	3.3cm	-	17c後半～ 18c 初頭		蛇の目高台 曼村のみ露胎
15 SD023	青磁	丸皿	伊万里	11.3cm	7.1cm	4.8cm	2.6YRS/2	17c		底部外縁はヘラ切り
16 SD023	陶器	鉄輪小皿	越中瀬戸	8.1cm	1.8cm	4.8cm	2.3YR/2	17c	内面：回転ナガ 外面：回転ナガ	
17 SK048	陶器	鉄輪小皿	越中瀬戸	(9.9cm)	2.2cm	(5.2cm)	7.8YR/2	17c	内面：回転ナガ、回転ナダ 外面：回転ナガ	曼村のみ露胎 見込みに印加紋
18 SK052	陶器	鉄輪小皿	越中瀬戸	(9.9cm)	2.6cm	(4.7cm)	2.3YR/2	17c	内面：回転ナガ、回転ナダ 外面：回転ナガ、回転ナダ	青白い露胎 見込みに印加紋
19 SD023	陶器	鉄輪小皿	越中瀬戸	10.0cm	3.0cm	4.6cm	10YR/2	17c	内面：回転ナガ 外面：回転ナガ、回転ナダ	見込みに目録
20 SK047	陶器	ひだ皿	越中瀬戸	(13.2cm)	3.6cm	(5.0cm)	7.8YR/2	18c	内面：前輪ナガ 外面：前輪ナガ、回転ナダ	見込みに鉢割
21 SD023	陶器	灯明受皿	越中瀬戸	(10.5cm)	2.7cm	4.7cm	10YR/3	17c以降	内面：前輪ナガ、回転ナダ 外面：前輪ナガ、回転ナダ	底部外縁に墨書き（記号？）
22 SK046	陶器	瓦軒小皿	瀬戸	10.6cm	2.6cm	6.1cm	2.5YR/1	16c 中頃	内面：回転ナガ 外面：回名ナガ	底部外縁に輪トテン痕
23 SD023	陶器	繩目皿	唐津	11.3cm	3.6cm	4.5cm	10YR/3	17c 初頭	内面：繩目 外面：繩目	東北方面に墨書き（文字不明） 見込みに目録
24 SK015	陶器	ビラ排拂	不明	9.4cm	6.9cm	4.0cm	6YR/4	19c 以前	内面：回転ナダ 外面：回転ナガ	東部外縁に墨書き
25 SK015	陶器	脊骨碗	不明	5.2cm	5.6cm	4.0cm	10YR/3	19c	内面：回転ナガ 外面：回転ナガ	底部外縁に墨書き「小林」
26 SD023	陶器	便	高取	(10.1cm)	11.4cm	8.0cm	2.3YR/6	18c～19c	内面：回転ナガ 外面：回転ナガ	底部附近は露胎
27 SD023	陶器	便	高取	(20.6cm)	(16.3cm)	-	2.3YR/5	18c～19c	内面：回転ナガ 外面：回転ナガ	内面：便に墨書き
28 SD023	陶器	大鉢	唐津	(24.9cm)	6.5cm	9.6cm	7.3YR/1	17c 初頭～ 18c 初頭	内面：回転ナガ 外面：回転ナガ	東部外縁に墨書き（記号か？） 内面：粗粒状
29 SD029	土器	土師皿	在地	10.2cm	2.0cm	4.2cm	10YR/1	18c 以前	内面：回転ナガ 外面：回転ナガ	残存率1%
30 SK046	土器	土師皿	在地	12.8cm	2.3cm	6.6cm	2.3YR/5	18c 以前	内面：回転ナガ 外面：回転ナガ	残存率10.0% 内面に墨書き
31 SK012	土器	土師皿	在地	12.7cm	3.1cm	8.0cm	2.3YR/2	18c 以前	内面：回転ナガ 外面：回転ナガ	口縁部に墨書き
32 SK048	土器	土師皿	在地	12.1cm	2.6cm	7.0cm	7.3YR/6	18c 以前	内面：回転ナガ 外面：回転ナガ	残存率7.6% 内面に墨書き
33 SK046	土器	土師皿	在地	14.7cm	2.8cm	10.2cm	7.3YR/4	18c 以前	内面：回転ナガ 外面：回転ナガ	残存率1/4 内面に墨書き
34 SK039	土器	土師皿	在地	10.4cm	(3.2cm)	-	7.5YR/4	17c	内面：回転ナガ 外面：回転ナガ	残存率1/10以下
35 SK053	土器	土師皿	在地	(13.0cm)	2.9cm	(5.6cm)	10YR/4	17c	内面：回転ナガ 外面：回転ナガ	残存率1/4 内面に墨書き
36 SK016	土器	土師皿	在地	6.9cm	1.9cm	3.3cm	10YR/2	17c 以前	内面：回転ナガ 外面：回転ナガ	口縁部に墨書き 見込みに墨書き「良」
37 SD021	瓦器	火消塵壺	在地	16.0cm	5.4cm	3.5cm	2.3YR/1	18c 以前	内面：こぼれ 外面：こぼれ	
38 SD043	瓦器	火消塵壺	在地	22.5cm	1.6cm	22.6cm	2.3YR/2	19c 以前	内面：こぼれ 外面：こぼれ	
39 SK015	瓦器	灰炉	在地	(22.1cm)	21.4cm	15.6cm	2.3YR/1	18c 以前	内面：こぼれ 外面：こぼれ	
40 SD038	銅製品	灰搖	在地	19.3cm	0.5～ 0.5cm	13.7cm	-	19c 以前		新郎に「平又」「早」の刻書

第4章 自然科学分析

第1節 富山城下町遺跡主要部の花粉分析

1. はじめに

富山市に所在する富山城下町遺跡で発掘調査が行われ、遺跡が成立する以前（地山）の古植生を調べるために花粉分析用の試料が採取された。以下では、試料について行った花粉分析の結果とその考察について記す。

2. 試料と方法

分析試料は、南壁から採取された計5点である（表2）。これらの試料を用いて、次の手順で花粉分析を行った。

試料（湿重量約4～5g）を遠沈管にとり、10%水酸化カリウム溶液を加え10分間湯煎する。水洗後、46%フッ化水素酸溶液を加え1時間放置する。水洗後、比重分離（比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、統いてアセトトリス処理（無水酢酸9：濃硫酸1の割合の混酸を加え10分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを滴下し保存用とする。検鏡はこの残渣より適宜ブレバラートを作製して行った。作製したブレバラートは全面を検鏡し、その間に現れる花粉・胞子を全て数えた。また、保存状態の良好な花粉化石を選んで単体標本（PLC. 1369～1375）を作製し、写真を図版に載せた。

3. 結果

今回は遺物No.1のみにしか花粉化石が含まれていなかった。

No.1から検出された花粉・胞子の分類群数は樹木花粉7、草本花粉6、形態分類のシダ植物胞子2の総計15である。これらの花粉・胞子の一覧表を表3に示した。今回の分析試料は、ブレバラート全面を検鏡しても樹木花粉数が200個に届かず、花粉化石がほとんど産出しなかったため、分布図は示していない。

4. 考察

一般的に花粉粒の大きさは直径0.02mm～0.06mmの範囲に入るものが多く、泥（粘土、シルト）の大きさとほぼ同じである。よって、植物から散布された花粉は陸域や水域に落下した場合、泥などの細粒な粒子と同じような挙動を示すと思われる。今回分析した試料は砂を主体とした粗粒堆積物であり、砂粒と花粉は堆積環境における挙動が異なるため、砂を主体とする試料には花粉がとどまりにくかったと思われる。細粒堆積物が含まれるNo.1の試料から、わずかではあるが花粉化石が産出しているため、No.1の花粉化石から遺跡が成立する以前（地山1層）の古植生を推測した。

No.1の樹木花粉において、比較的産出が多い分類群として、マツ属複維管束亞属やコナラ属コナラ亜属、クリ属が挙げられ

森 将志（パレオ・ラボ）

表2 分析試料一覧表

遺物No.	遺構	層位	土相
1	南壁	地山1層	シルト混じり粗粒砂
2		地山2層	中粒砂
3		地山3層	粗粒混じり粗粒砂
4		地山4層	中粒砂
5		地山5層	粗粒混じり粗粒砂

表3 産出花粉胞子一覧表

分類群	学名	No.1	No.2	No.3	No.4	No.5
裸子植物						
Pinaceae	マツ属	1	—	—	—	—
Pinus sylvestris	マツ属複維管束亞属	—	—	—	—	—
Gymnospermae	マツ属混生マツ属	2	—	—	—	—
Araceae	バショウ属	4	—	—	—	—
Convolvulaceae	ヒメジョウロ属	4	—	—	—	—
Convolvulus sepium	ヒメジョウロ属ヒメジョウロ	1	—	—	—	—
Cyperaceae	ヨシ属	—	—	—	—	—
Gramineae	イネ属	15	—	—	—	—
Gramineae - Avenatinae	アザミ属ヒメイネ	15	—	—	—	—
Gramineae	クサチク属	9	—	—	—	—
Gramineae	カキツバタ属	2	—	—	—	—
Gramineae	クサチク属	1	—	—	—	—
Liliaceae	ラン科	—	—	—	—	—
Liliaceae	ラン科	—	—	—	—	—
Monocotyledoneae	トリコシモ属	32	—	—	—	—
Monocotyledoneae	トリコシモ属	4	—	—	—	—
Araceae	モウセンゴケ属	24	—	—	—	—
Ranunculaceae	ゼンマイ属	47	—	—	—	—
Ranunculaceae	ゼンマイ属	10	—	—	—	—
Ranunculaceae	ソバノリ属	—	—	—	—	—
Ranunculaceae	ソバノリ属	—	—	—	—	—
Salicaceae	ヤマモガ属	—	—	—	—	—
Salicaceae	ヤマモガ属	—	—	—	—	—

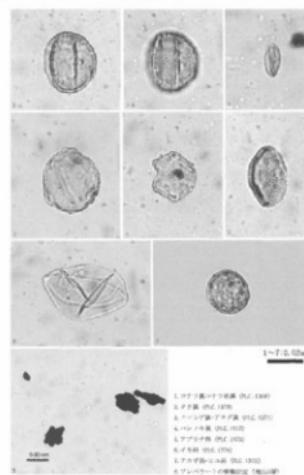


図11 富山城下町遺跡（地山1層）から
産出した花粉化石および
ブレバラート検鏡状況

る。これらは陽樹を含む分類群であり、二次林要素として知られるため、遺跡周辺にはニヨウマツ類やコナラ、クリなどからなる二次林が広がっていた可能性がある。二次林が広がるような明るい場所にはイネ科やアザダ科-ヒユ科、アブラナ科、ヨモギ属、キク亜科、タンボボ亜科などの草本類が生育していた。また、湿地林要素のハンノキ属の産出から、遺跡周辺の低地などにはハンノキ林が分布するような湿地的環境が存在していた可能性がある。

第2節 富山城下町遺跡主要部 地山堆積物中の珪藻化石群集

藤根 久 (バレオ・ラボ)

1.はじめに

珪藻は、10～500 μmほどの珪酸質殻を持つ單細胞藻類で、殻の形や刻まれた模様などから多くの珪藻種が調べられ、現生の生態から特定環境を指標する珪藻群が設定されている（小杉、1988；安藤、1990）。一般的に、珪藻の生育域は海水域から淡水域まで広範囲に及び、中には河川や沼地などの水成環境以外の陸地においても、わずかな水分が供給されるジメジメとした陸域環境（例えばコケの表面や湿った岩石の表面など）に生育する珪藻種が知られている。こうした珪藻群集の性質を利用して、堆積物中の珪藻化石群集の解析から、過去の堆積物の堆積環境について知ることができる。

ここでは、富山城下町遺跡の地山堆積物中の珪藻化石群集を調べ、堆積環境について検討した。

2. 試料と方法

試料は、富山城下町遺跡の地山堆積物5点である（表4）。

各試料について以下の処理を行い、珪藻分析用プレパラートを作製した。

(1) 濡潤重量約0.5gを取り出し、秤量した後ビーカーに移して30%過酸化水素水を加え、加熱・反応させ、有機物の分解と粒子の分散を行った。(2) 反応終了後、水を加え1時間程してから上澄み液を除去し、細粒のコロイドを捨てる。この作業を5回ほど繰り返した。(3) 懸濁残渣を遠心管に回収し、マイクロビペットで適量取り、カバーガラスに滴下し乾燥させた。乾燥後は、マウントメディアで封入しプレパラートを作製した。

作製したプレパラートは顕微鏡下600倍および1500倍で観察し、珪藻化石200個体以上について同定・計数した。なお、珪藻化石の少ない試料（分析No.5）についてはプレパラート全面を観察した。珪藻殻は、完形と非完形（原則として半分程度残っている殻）に分けて計数し、完形殻の出現率として示した。また、試料の処理重量とプレパラート上の計数面積から堆積物1g当たりの珪藻殻数を計算した。

3. 硅藻化石の環境指標種群

珪藻化石の環境指標種群は、主に小杉（1988）および安藤（1990）が設定し、千葉・澤井（2014）により再検討された環境指標種群に基づいた。なお、環境指標種群以外の珪藻種については、淡水種は広布種（W）として、海水～汽水種は不明種（?）としてそれぞれ扱った。また、破片のため属レベルの同定にとどめた分類群は、その種群を不明（?）として扱った。以下に、小杉（1988）が設定した海水～汽水域における環境指標種群と安藤（1990）が設定した淡水域における環境指標種群の概要を示す。

〔外洋指標種群（A）〕：塩分濃度が35‰以上の外洋水中を浮遊生活する種群である。

〔内湾指標種群（B）〕：塩分濃度が26～35‰の内湾水中を浮遊生活する種群である。

〔海水藻場指標種群（C1）〕：塩分濃度が12～35‰の水域の海藻や海草（アマモなど）に付着生活する種群である。

〔海水砂質干潟指標種群（D1）〕：塩分濃度が26～35‰の水域の砂底（砂の表面や砂粒間）に付着生活する種群である。この生育場所には、ウミニア類、キサゴ類、アサリ、ハマグリ類などの貝類が生

表4 硅藻分析試料一覧

分析No.	位置	層位	堆積物の特徴
1	地山1層	シルト混じり細粒砂	
2	地山2層	中粒砂	
3	南壁	地山3層	礫混じり粗粒砂
4		地山4層	中粒砂
5		地山5層	礫混じり粗粒砂

表5 堆積物中の珪藻化石産出表

(種群は、千葉・澤井(2014)による)

活する。

[海水泥質干潟指標種群(E1)]：塩分濃度が12~30‰の水域の泥底に付着生活する種群である。この生育場所には、イボウミニア主体の貝類相やカニなどの甲殻類相が見られる。

[汽水藻場指標種群(C2)]：塩分濃度が4~12‰の水域の海藻や海草に付着生活する種群である。

[汽水砂質干潟指標種群(D2)]：塩分濃度が5~26‰の水域の砂底（砂の表面や砂粒間）に付着生活する種群である。

[汽水泥質干潟指標種群(E2)]：塩分濃度が2~12‰の水域の泥底に付着生活する種群である。淡水の影響により、汽水化した塩性湿地に生活するものである。

[上流性河川指標種群(J)]：河川上流部の渓谷部に集中して出現する種群である。これらは、殻面全体で岩にびったりと張り付いて生育しているため、流れによってはぎ取られてしまうことがない。

[中～下流性河川指標種群(K)]：河川の中～下流部、すなわち河川沿いで河成段丘、扇状地および自然堤防、後背湿地といった地形が見られる部分に集中して出現する種群である。これらの種には、柄またはさやで基物に付着し、体を水中に伸ばして生活する種が多い。

[最下流性河川指標種群(L)]：最下流部の三角州の部分に集中して出現する種群である。これらの、種には、水中を浮遊しながら生育している種が多い。これは、河川が三角州地帯に入ると流速が遅くなり、浮遊生の種でも生育できるようになるためである。

[湖沼浮遊生指標種群(M)]：水深が約1.5m以上で、岸では水生植物が見られるが、水底には植物が生育していない湖沼に出現する種群である。

No.	分類群	種群	種群				
			1	2	3	4	5
1	<i>Actinopeltis</i>	<i>ingens</i>	A	?		1	1
2	<i>A.</i>	<i>app.</i>	?				
3	<i>Gaudichaudia</i>	<i>marginata</i>	A	?	1	4	5
4	<i>G.</i>	<i>app.</i>	?	?		1	
5	<i>Stephanodiscus</i>	<i>sp.</i>	?	?			
6	<i>Thalassiosira</i>	<i>nitzschiae</i>	A	2	3	3	2
7	<i>Heterotheca</i>	<i>flava</i>	?		1	9	1
8	<i>Diatomea</i>	<i>brevispis</i>	?		2	5	1
9	<i>Diatomea</i>	<i>longirostrata</i>	?		2	5	1
10	<i>A.</i>	<i>ovalis</i>	?				
11	<i>A.</i>	<i>montana</i>	Qn	2	4	5	
12	<i>A.</i>	<i>ambigua</i>	N			2	14
13	<i>A.</i>	<i>sp.</i>	?		1		1
14	<i>Caloneis</i>	<i>bucellum</i>	W	2	2		
15	<i>C.</i>	<i>silicula</i>	W	2			
16	<i>Gyrosigma</i>	<i>disolum</i>	W	3	2	12	74
17	<i>G.</i>	<i>plumulae</i>	W	3	2		10
18	<i>G.</i>	<i>sp.</i>	?				
19	<i>Cyclotella</i>	<i>leptocerata</i>	W	1			
20	<i>C.</i>	<i>parvula/fumigata</i>	W	6	2		
21	<i>C.</i>	<i>pinnularis</i>	W	1			
22	<i>C.</i>	<i>tetraedra</i>	W	1	1	3	20
23	<i>C.</i>	<i>turgida</i>	K	1	1	10	1
24	<i>C.</i>	<i>sp.</i>	?	4			
25	<i>Diadema</i>	<i>caudatum</i>	Qb	1		1	
26	<i>D.</i>	<i>sp.</i>	Qb	2	4	5	
27	<i>Diatomea</i>	<i>hemiceras</i>	E				
28	<i>Diatomea</i>	<i>hemiceras</i>	quadrum				
29	<i>Diatomea</i>	<i>parva</i>	W	1			
30	<i>Diatomea</i>	<i>adusta</i>	W	30	1	1	
31	<i>D.</i>	<i>sericea</i>	W				
32	<i>D.</i>	<i>taeniata</i>	?				
33	<i>D.</i>	<i>sp.</i>	?				
34	<i>D.</i>	<i>sp.</i>	?				
35	<i>D.</i>	<i>sp.</i>	?				
36	<i>Hansea</i>	<i>arcuata</i>	Qb	1			
37	<i>Hantzschia</i>	<i>amphioxys</i>	Qb	16	10	13	2
38	<i>Lenticula</i>	<i>nitida</i>	Qb	1	4	4	1
39	<i>L.</i>	<i>bicornuta</i>	Qb	1			
40	<i>R.</i>	<i>erythrocephala</i>	W	3			
41	<i>R.</i>	<i>elgivaensis</i>	W	6		1	1
42	<i>R.</i>	<i>equisetina</i>	W	1	1	2	1
43	<i>R.</i>	<i>motae</i>	W	1	1	2	1
44	<i>R.</i>	<i>polyporum</i>	W	1			
45	<i>R.</i>	<i>radicans</i>	W				
46	<i>R.</i>	<i>tenellulae</i>	W	2	2		
47	<i>R.</i>	<i>veneris</i>	W	3	19	7	2
48	<i>R.</i>	<i>sp.</i>	?	3	10	9	1
49	<i>R.</i>	<i>affine</i>	W	1	1		
50	<i>Noctidium</i>	<i>angustissima</i>	W	5	5	4	
51	<i>N.</i>	<i>longistylum</i>	W	5	5		
52	<i>N.</i>	<i>longistylum</i>	W	5	5		
53	<i>Nitzschia</i>	<i>subtilis</i>	Qb	5	5		
54	<i>N.</i>	<i>utana</i>	Qb	5	5		
55	<i>N.</i>	<i>pales</i>	W	16	27	7	
56	<i>N.</i>	<i>parvula</i>	W	1	7	3	
57	<i>N.</i>	<i>sp.</i>	?	1		2	
58	<i>Pinnularia</i>	<i>angulosa</i>	Qb				3
59	<i>P.</i>	<i>torulosa</i>	Qb		1	1	
60	<i>P.</i>	<i>brunnei</i>	W	2			
61	<i>P.</i>	<i>longirostrata</i>	W	5			
62	<i>P.</i>	<i>gibba</i>	W	6		1	1
63	<i>P.</i>	<i>subapicata</i>	Qb	45	58	41	
64	<i>P.</i>	<i>sp.</i>	?	9	3	3	
65	<i>R. (R.)</i>	<i>armata</i>	E	12	41	17	21
66	<i>Rhizosolenia</i>	<i>curvata</i>	E				2
67	<i>Rhizopoda</i>	<i>gibba</i>	W	2		1	
68	<i>R.</i>	<i>gibberula</i>	W		2		
69	<i>R. (R.)</i>	<i>longirostrata</i>	Qb			1	1
70	<i>S.</i>	<i>undulata</i>	W	1			
71	<i>Sartirula</i>	<i>angustata</i>	W	4	1		
72	<i>S.</i>	<i>sp.</i>	?	1			
73	<i>Synedra</i>	<i>rostrata</i>	W	1			
74	<i>S.</i>	<i>ulna</i>	W	4	10	9	6
75	<i>S.</i>	<i>sp.</i>	?				1
76	<i>Ulnaria</i>	<i>longiquillae</i>	E	17	23	12	6
77	<i>Ulnaria</i>	<i>longiquillae</i>	Qb	2	1	6	3
78			?				1
79			?			5	6
80			?				1
81			?				1
82			?		1	11	1
83			?		2	2	15
84			?		2	7	4
85			?		1	1	
86			?		26	6	3
87			?		62	42	
88			?		80	76	81
89			?		33	13	20
90			?		17	23	12
91			?		1	9	9
92			?				1
93			?			11	1
94			?			84	
95			?			152	159
96			?			207	210
97			?			47.8	63.4
98			?			50.7	69.3
99			?			53.0	53.0
100			?			5.004	2.4114 ± 2.029
101			?			3.9873	3.9873
102			?			9.2142	9.2142

〔湖沼沼澤湿地指標種群(N)〕：湖沼における浮遊生種としても、沼澤湿地における付着生種としても優勢な出現が見られ、湖沼・沼澤湿地の環境を指標する可能性が大きい種群である。

〔沼澤湿地付着生指標種群(O)〕：水深1m内外で、一面に植物が繁殖している所および湿地において、付着の状態で優勢な出現が見られる種群である。

〔高層湿原指標種群(P)〕：尾瀬ヶ原湿原や霧ヶ峰湿原などのように、ミズゴケを主とした植物群落および泥炭層の発達が見られる場所に出現する種群である。

〔陸域指標種群(Q)〕：上述の水域に対して、陸域を生息地として生活している種群である（陸生珪藻と呼ばれている）。

〔陸生珪藻A群(Qa)〕

耐乾性の強い特定のグループである。

〔陸生珪藻B群(Qb)〕

A群に随伴し、温った環境や水中にも生育する種群である。

4. 結果および考察

堆積物から検出された珪藻化石は、海水種が6分類群4属3種、海～汽水種が1分類群1属1種、汽水種が2分類群2属2種、淡水種が76分類群27属53種3変種であった。これらの珪藻化石は、海水域における1環境指標種群(A)、淡水域における6環境指標種群(K、N、O、P、Qa、Qb)に分類された(表5)。これらの珪藻化石群集の特徴から、堆積物は大きく4帯に分帶された。

以下では、各珪藻帯の珪藻化石の特徴と堆積環境について述べる。

I带(分析No.5)

堆積物1g中の珪藻殻数は 9.2×10^2 個、完形殻の出現率は43.0%である。全体的には、概ね淡水種珪藻化石からなる。環境指標種群は、中～下流性河川指標種群(K)と湖沼沼澤湿地指標種群(N)が多く、沼澤湿地付着生指標種群(O)や陸生珪藻A群(Qa)などを伴う。

環境指標種群の特徴から、中～下流性河川～湖沼沼澤湿地環境が推定される。

II带(分析No.4)

堆積物1g中の珪藻殻数は 3.8×10^3 個、完形殻の出現率は49.3%である。全体的には、概ね淡水種珪藻化石からなる。環境指標種群は、中～下流性河川指標種群(K)が多く、沼澤湿地付着生指標種群(O)や湖沼沼澤湿地指標種群(N)あるいは陸生珪藻A群(Qa)などを伴う。

環境指標種群の特徴から、中～下流性河川環境が推定される。

III带(分析No.2、No.3)

堆積物1g中の珪藻殻数は 2.4×10^4 個および 2.2×10^3 個、完形殻の出現率は63.4%および50.7%である。全体的には、概ね淡水種珪藻化石からなる。環境指標種群は、陸生珪藻B群(Qb)や陸生珪藻A群(Qa)が多く、中～下流性河川指標種群(K)などを伴う。

環境指標種群の特徴から、中～下流性河川の影響を受けるジメジメとした陸域環境が推定される。

IV带(分析No.1)

堆積物1g中の珪藻殻数は 5.0×10^4 個、完形殻の出現率は47.8%である。全体的には、概ね淡水種珪藻化石からなる。環境指標種群は、陸生珪藻B群(Qb)や陸生珪藻A群(Qa)が多く、沼澤湿地付着生指標種群(O)などを伴う。

環境指標種群の特徴から、沼澤湿地を伴うジメジメとした陸域環境が推定される。

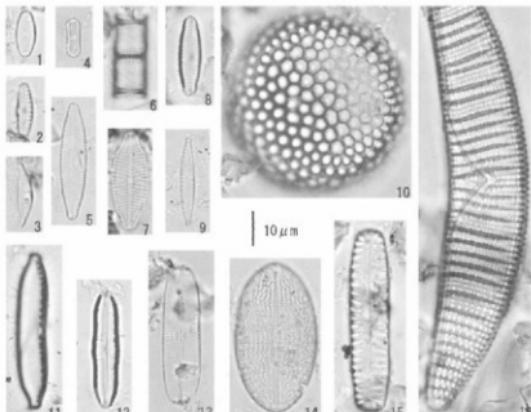
5. おわりに

富山城下町遺跡の地山堆積物について珪藻分析を行った。その結果、環境指標種群の特徴から、4帯に区分された。下位より、中～下流性河川～湖沼沼澤湿地環境(I带)、中～下流性河川環境(II带)、中～下流性河川の影響を受けるジメジメとした陸域環境(III带)、沼澤湿地を伴うジメジメとした陸域環境(IV带)であった。

これらの堆積物は、泥質分の少ない細粒砂～粗粒砂であるにも関わらず、小型の珪藻化石が比較的多く検出された。



図 12 堆積物中の珪藻化石分布図（主な分類群を表示）



1. *Luticola mutica* (No. 3) 2. *Reimoseria sinuata* (No. 2) 3. *Amphora montana* (No. 2)
 4. *Disseisus contenta* (No. 1) 5. *Navicula veneta* (No. 3) 6. *Aulacoseira ambigua* (No. 4)
 7. *Navicula elginensis* (No. 3) 8. *Pinnularia subcapitata* (No. 2) 9. *Nitzschia palea* (No. 2)
 10. *Coscinodiscus marginatus* (No. 4) 11. *Hantzschia amphioxys* (No. 2)
 12. *Caloneis silicula* (No. 1) 13. *Navicula bacillaris* (No. 4) 14. *Cocconeis plicentula* (No. 3)
 15. *Pinnularia borsalis* (No. 3) 16. *Epithemia turgida* (No. 4)

図 13 堆積物中の珪藻化石の顕微鏡写真

第5章 総括

当該地は絵図との比較、及び過年度調査で検出された背割下水との位置関係から武家屋敷地区に該当する。

調査の結果、検出した遺構は土坑、ピット、溝、井戸など50基を数えるが、武家屋敷を構成する柱穴や礎石などの痕跡は確認できなかった。

出土遺物の大半は18世紀後半～19世紀代の肥前系陶磁器が占めており、今回検出した遺構のほとんどがこの時期のものである。その他時代がさかのぼる遺構にはSK047・052・053などがあり、17世紀代の肥前系磁器や越中瀬戸焼などが出土している。

検出遺構の中でも調査区中央部及び東端部で検出したSD023・SD026の2条の溝は、屋敷と屋敷の境に設けられた区画溝の可能性がある。SD026からは年代を示す遺物が乏しいが、SD023からは19世紀代を主体とする多量の陶磁器が出土しているほか、17世紀代のものもみられるところから、ほぼ同位置で溝が造りかえられた可能性がある。

その他、遺物が大量に出土した土坑（SK014・015）は廃棄土坑と考えられ、当該地が屋敷の裏手にあたることを示唆するものであろう。

次に屋敷の持ち主について、右図に示した通り4時期の絵図に人名が記載されている。それによると当該地は下記のように家主の変遷を知ることができる。

万治年間（1658～1661）→片岡彦右衛門（図14）

寛文六年（1666）→片岡傳兵衛・瀬兵衛（図15）

江戸末期（1830～1863）→滝川多門（図16）

安政元年（1854）→小林貞右衛門（図17）

このことに関連して、器体に墨書・朱書・線刻によって人名や記号が記された陶磁器や銅製品などの遺物が約40点出土している。多くは19世紀代の磁器の皿や碗の底部外面に朱書きされたもので、「そ（曾）川小林」と書かれたものが6点出土しているほか、「平又」や「小竹」といった名前も散見される。これらの文字は、割れた器を修復した焼継師によって記された焼



図14 万治年間富山旧市街図 富山県立図書館蔵

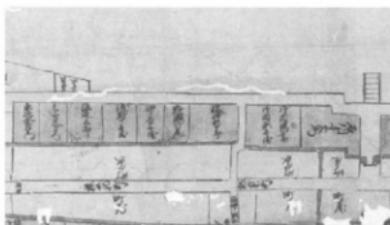


図15 御調理富山絵図 富山県立図書館蔵



図16 御城内外御焼失御絵図 富山県立図書館蔵

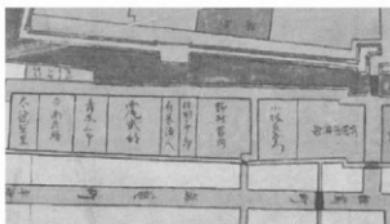


図17 越中富山御城下絵図 富山県立図書館蔵

縦印である。中でも「そ（曾）川小林」の名前は図17にみられる「小林貞右衛門」との関係が推測され、調査地が19世紀中頃に小林貞右衛門の屋敷であったことを裏付ける可能性を持つ。もしくは、その他複数の人名の焼継印が出土したことから考えれば、周辺の町屋に焼継を生業とする者がいたことを示唆しているのかもしれない。

以上のように、今回の調査では主として19世紀代の遺構・遺物を検出した。武家屋敷を構成する遺構は確認できなかったが、同時代の絵図に記された藩士との関係をうかがわせる遺物や、屋敷の区画構と考えられる遺構が確認されたほか、現地表面から比較的浅い位置に近世遺構面が遺存していることなどが明らかとなった。調査面積が狭小なため推測にとどまるところが多いが、今後の調査の進展を待って再考したい。
(日聖)

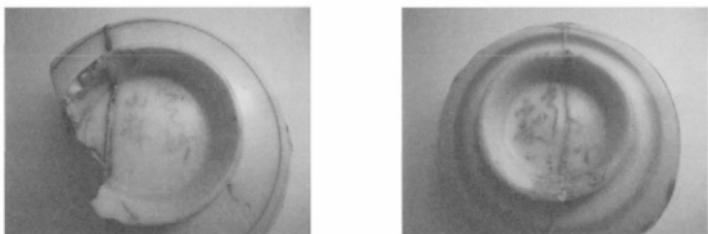


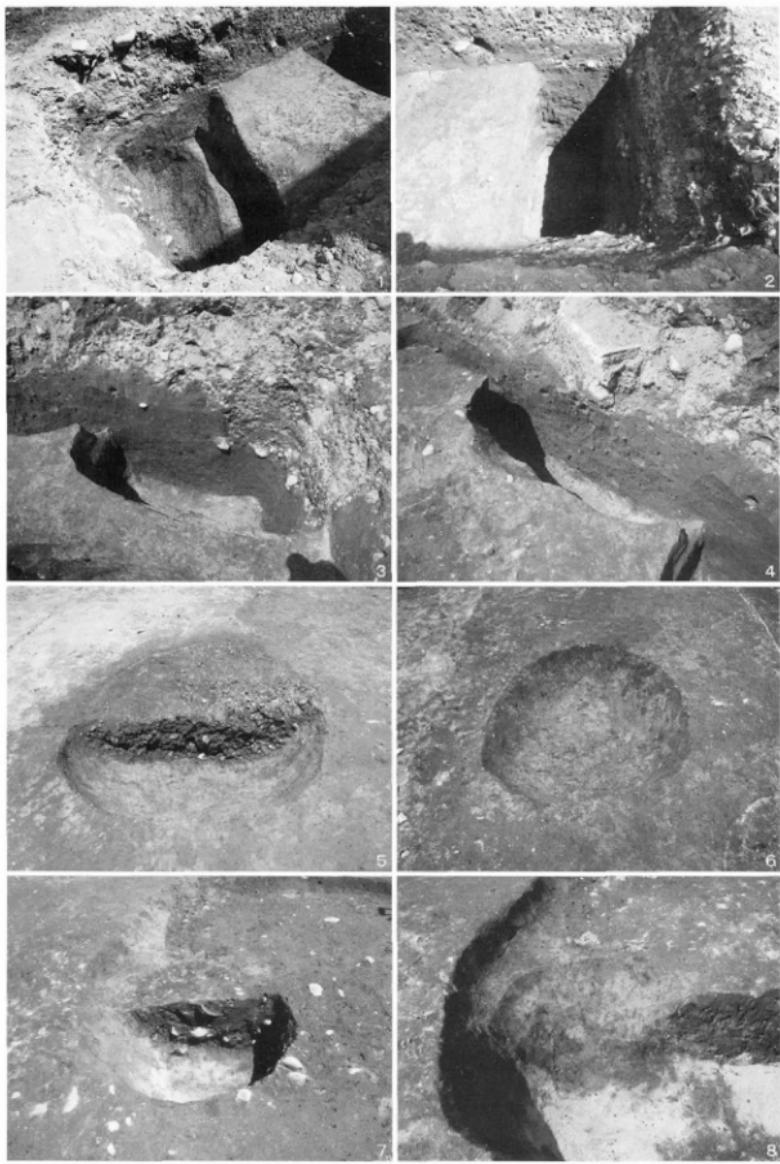
図 18 焼継印

<参考、引用文献>

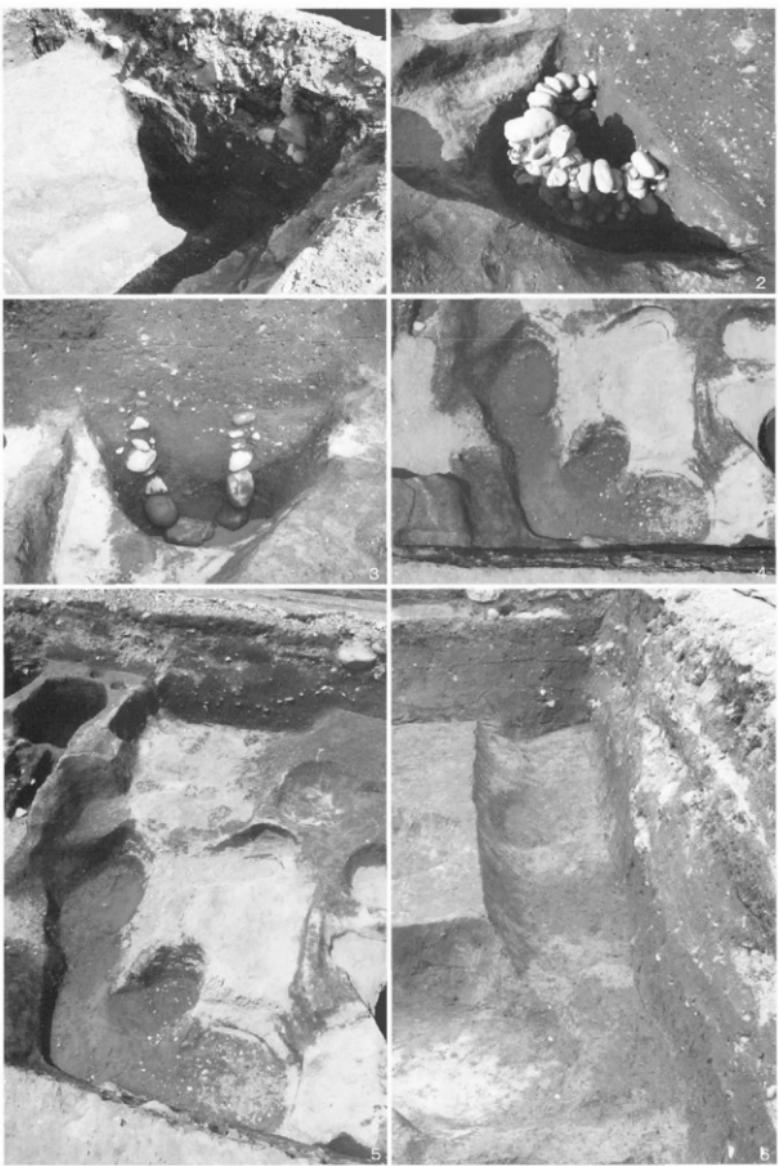
- 富山市教育委員会 2004 『富山城跡試掘確認調査報告書』
富山市教育委員会 2005 『富山城跡発掘調査概要』
富山市教育委員会 2006a 『富山城跡試掘確認調査報告書』
富山市教育委員会 2006b 『富山城跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会 2007 『富山城跡試掘確認調査報告書』
富山市教育委員会 2008 『富山城跡試掘確認調査報告書』
富山市教育委員会 2009a 『富山城跡試掘確認調査報告書』
富山市教育委員会 2009b 『富山城跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会 2010 『富山城跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会 2014a 『富山城下町遺跡主要部発掘調査報告書』
富山市教育委員会 2014b 『富山城下町遺跡主要部発掘調査報告書』
富山県 1982 『富山県史 通史編III 近世 上』
古泉弘 1983 『江戸を掘る』 柏書房
高瀬保 1987 『富山藩侍帳 越中資料集成1』 桂書房
田中喜男 1993 『城下町富山の町民とくらし』 高科書店
大橋康二 1994 『古伊万里の文様』 理工学社
九州近世陶磁学会 2000 『九州陶磁の編年—九州近世陶磁学会10周年記念—』
江戸造跡研究会編 2001 『図説江戸考古学研究辞典』 柏書房
古川知明 2006 「近世富山城の繩張りについて」『富山史壇』第149号 越中史壇会
古川知明 2014 『富山城の繩張と城下町の構造』 桂書房
安藤一男 (1990) 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 東北地理, 42, 73-88.
千葉 崇・澤井裕紀 (2014) 環境指標種群の再検討と更新. Diatom, 30, 7-30.
小杉正人 (1988) 硅藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 第四紀研究, 27, 1-20.



1. 調査前状況（東から）
2. 調査区完掘状況（東から）



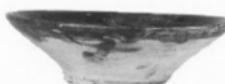
1. SX001 剖面・完掘状況 (南西から)
2. SX002 剖面・完掘状況 (南から)
3. SK012 剖面・完掘状況 (北東から)
4. SK013 剖面・完掘状況 (北東から)
5. SK014 剖面 (南から)
6. SK014 完掘状況 (南から)
7. SK015 剖面 (南から)
8. SK015 完掘状況 (南から)



1. SK022 断面・完掘状況（北西から）
3. SE039 断面・完掘状況（西から）
5. SD023 断面・完掘状況（南東から）

2. SE039 検出状況（南西から）
4. SK047, 052, 053 完掘状況（南東から）
6. SD026 断面・完掘状況（南から）





20



21



22



23



24



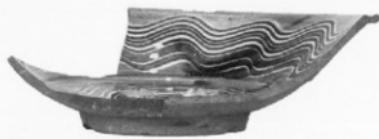
26



25



27



28



31



32



35



37



38



36



39



40

報 告 書 抄 錄

ふりがな	とやまじょうかまちいせきしゅようぶははくつちょうさほうこくしょ							
書名	富山城下町遺跡主要部発掘調査報告書							
副題	レーベン富山総曲輪レジデンス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査							
シリーズ名	富山市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	73							
編著者名	細辻嘉門、日聖祐輔、名久井伸哉、森将志、藤根久							
編集機関	株式会社イビゾク 北陸支店 TEL 076-482-5061							
編集機関所在地	〒930-0916 富山県富山市向新庄1358番5号							
発行機関	富山市教育委員会 埋蔵文化財センター							
発行機関所在地	〒930-091 富山県富山市愛宕町1丁目2-24							
発行年月日	西暦2014年12月26日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	通路番号	○ / ○	○ / ○			
とやまし 富山市	とうがわ 総曲輪	16201	2011048	36° 41' 22"	137° 12' 37"	20140507 ~ 20140603	96	マンション建設工事
しゅようぶ 主要部	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
	城下町	近世	井戸、溝、土坑、 ピット		肥前系陶磁器、 越中瀬戸焼、土師皿、 土製品(箱庭・人形)、 銅製品	19世紀代を主体とする肥前系 陶磁器が出土した。		
要約	<p>本調査地は富山城下町の武家屋敷地にあたる。ピットや土坑を中心に約50基の遺構を検出した。廐棄土坑や井戸が確認できることから、屋敷の裏手に位置する。また、調査区中央部には区画溝と考えられる南北方向の溝(SD023)があり、埋土中からは19世紀の肥前系陶磁器が多量に出土した。この中には『そ(曾)川小林』と書かれた陶転印をもつ磁器碗が複数確認できることから、当地が『越中富山御城下給園』に記された小林貞右衛門の屋敷であることを裏付ける可能性がある。</p> <p>珪藻分析の結果、当該地は下位より中・下流性河川・湖沼沼沢湿地環境、中・下流性河川環境、中・下流性河川の影響を受けるジメジメとした肥城環境、沼沢湿地を伴うジメジメとした肥城環境であったことが推定され、井戸などの遺構が多いことから、水場として利用されたことが考えられる。</p> <p>また、花粉分析の結果から周辺にはコナラやクリなどからなる二次林が広がり、低地部には湿地的環境が存在した可能性が示された。</p>							

富山市埋蔵文化財調査報告書

富山城下町遺跡主要部発掘調査報告書 —レーベン富山総曲輪レジデンス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査—

発行日 平成26(2014)年12月26日

編集 株式会社イビゾク 北陸支店

〒930-0916 富山県富山市向新庄1358番5号

発行 富山市教育委員会埋蔵文化財センター

〒930-091 富山県富山市愛宕町1丁目2-24

Tel 076-442-4246 FAX 076-442-5810

E-mail maizoubunka-01@city.toyama.lg.jp

印刷 富士出版印刷株式会社

